

◆連載-Vol.41

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948年神奈川県生まれ。  
1971年千葉大学建築学科卒業、  
『住宅特集』『新建築』編集長を  
経て1994年からフリー編集  
者。1999年～2014年千葉大  
学客員教授。

## 最終章 — 地方の復権 2

高知には気候風土に対応した伝統的な技術や素材、木造の構法が受け継がれているが、外に現われる形として特徴的なものは水切瓦であろう。同様に雪国の一部、具体的にいえば砺波地方に残る合掌造りはさらに強い形態を持っている。岐阜県白川村、富山県の五箇山に残り、白川村荻町は世界文化遺産に登録され、観光客で賑わっている。雪深いこの地方の合掌造りは気候風土だけではなく、生活手段ともいえるべき養蚕とも強く結びついている。

岐阜県の北端、富山県と接する辺りに宮川村(現飛騨市)がある。ここには合掌造りは見られず、勾配の緩い切妻屋根がほとんどだった。ある家の内部を見せていただいたところ、立派な柱梁であり、全体の構成からはこれだけ丈夫につくる必要はないはずだ。そこで住人に聞いたところ、以前は合掌造りだったが、養蚕も止めたし茅も手に入らないので屋根を葺き替えたとのことだった。荻町を代表する民家、和田家のご当主に茅の入手先を聞いたところ、御殿場だという。自衛隊の演習場が茅の生産地になっているのだ。かつては集落毎に茅場があり、結によって年毎に交代で屋根を葺き替えていたのだが、今は茅場もない。しかし荻町には住人によって葺き替えの技術は継承されている。

この白川の地で家を建てようとしたら、どのようなデザインが相応しいのか。すでにサーベいは数多くなされ、間取りや空間構成、構法や材料などは明らかになっている。さて、その上でどのようなデザインをするか、建築家諸氏には考えていただきたい課題である。

全国的に言えば、このように特徴的な形態を持つ地方だけではない。むしろ新しい街をどうつくるかがこれからの課題だろう。その点から、最後にいくつか紹介したい。

### 湘南の建築家たち

湘南といえば、今や全国区の地名である。私は神奈川県藤沢市に住んでいるが、少し離れた土地に往き、どこから来たかと問われて「藤沢」といっても知らない人が多い。そこで「湘南です」と言うと、ほとんどの方が、ああ、と納得してくれる。だからといって具体的な場所がわかっているどうかは不明。時には江ノ島の名が出てくることもある。時にはサザンオールスターズのおかげか烏帽子岩が出てくることもある

けれど、残念ながら茅ヶ崎であって藤沢ではない。地図を見ても、湘南台はあるけれど湘南という地名はない。どこが湘南の発祥の地かは諸説紛々。最も狭いのが西浜(江ノ島の西側の浜で辻堂海岸より手前)だけ、というもの。次は藤沢市の海に面した一帯だが東海道線以南。さらに加山雄三、いや菊竹清訓の茅ヶ崎パシフィックホテルによって茅ヶ崎も湘南に組み入れられた。

ところが、大磯町にある嶋立庵の敷地内に「著書湘南清絶地」との銘文の刻まれた石碑があり、ここを湘南の発祥地とする説もある。さらに湘南とは中国にある景勝の地、湘湖南を指し、これに比定されるのは津久井湖であるなどの説も飛び出している。数年前の新聞の折り込みに「北湘南の云々」という売り文句でマンションの広告が入っていた。所在地を見たら厚木市だった。そして今は東は逗子、葉山から鎌倉は飛ばして藤沢、茅ヶ崎、平塚、大磯、二宮から小田原あたりまでが湘南を名乗っていることもある。

事程左様に、湘南のエリアは年々拡大しているようで、住人にも見当がつかない。しかし、湘南というブランドはしっかりと、全国的に定着している。

では湘南らしい住宅とは何だろう。『湘南スタイル』という住宅系の雑誌も季刊で発行されているが、掲載されている住宅にはどこか共通したイメージはあるのだが、これが相応しいかどうか。

大磯には吉田茂、伊藤博文、大隈重信、陸奥宗光など、時の元勳たちの別荘があって「政界の奥座敷」とも呼ばれ、明治期以降の洋風建築や近代和風が数多く残されており、国の「明治記念大磯庭園」となった。ただ残念ながら吉田茂邸は消失した。

そして藤沢。それも東海道線より南側の鵠沼と呼ばれる地域はもとも何もない白砂青松の地であったが、明治以降には東京に居を持つ富裕層の別荘地として和風の家々、いわゆる近代和風にあたるのかもしれないが、一見してただの仕舞屋にも見える家々が建ち始めた。時の流れと共に家並みは古ぼけ、徐々に無国籍なプレハブ住宅に置き換えられている。

かつての別荘もこれといった特徴のないものだから、こだわる人もほとんどいないのが現状である。

そんな状況の中で、「晴々ハウス」を自邸として設計したのが佐賀和光であった。

### 佐賀和光 — 自由な建築家

切妻の大屋根の架かった白い外壁の平屋で竣工は1979年。もともと江ノ島に注ぐ境川の河口近くの岸辺に接した佐賀家一族が住む大きな敷地の一郭に建てられ、わずかに離れて同じような外観で弟の家が建てられた。

南側の庭に面して大きな開口部を持ち、川側にはスリット状の開口部が設けられている。明るい内部には大きな吹抜けがあり、ロフトが佐賀夫妻の寝室で壁は設けられていない。屋根にはトップライトがいくつも設けられており、必要採光面積の数倍はあるだろう。そして網戸は初めから設けられていないし、エアコンのファンコイルユニットも壁にはない。

その理由は、「オレは頭をド突かれるくらい光が欲しいんだ。それにエアコンは嫌いだ。ファイコイルユニットって見苦しいだろ? 寒くても湘南は石油ストーブで十分。必要なら物置から出してきて、要らなくなったらしまえばいい。網戸なんて目障り。夏は窓の下に蚊取り線香を並べている」

佐賀和光(1939~1999)は生まれも育ちも藤沢の鵠沼で、湘南海岸が米軍の演習地だった頃、子どもだった佐賀は米兵たちにサーフィンを教わったというから、日本では最初期のサーファーであり、建築家であると同時にジャズピアニストでレコーディングもしており、模型のグライダーをつくっ

て飛ばすという多芸な人だった。

自宅を設計して以来、いや、それ以前から住宅を設計していたが、藤沢周辺に佐賀の住宅がだんだんと増えてくる。

「渡辺篤史の建ても探訪」にも数多く紹介された。おそらく紹介された建築家としては最多かもしれない。番組の中で渡辺が「さすが、佐賀さんの建築」という言葉を何度か使ったことを記憶している。

蛇足だが、佐賀はサーフィンをやっていた心筋梗塞により59歳で急逝。葬式は遺族の希望で喪服はなし。私にも「アロハで来て」と奥様から電話があり、アロハで会葬した。死装束には還暦祝いで着るはずの赤いウェットスーツが着せられていた。

一方で逗子に住む建築家、長島孝一(1936~)も同じように自分と弟の家を同一敷地内に、大屋根に白い外壁で設計した。そして逗子という狭い地域に数軒までは長島が設計した。しかし、知らない間に同じような家が増えてきた。その理由を長島が探ったところ、家を建替える人が大工を伴って外から長島が設計した家を見て、こんな感じの家にして欲しいと注文したのが原因のようだという。同じようなことが藤沢でも起こっている。佐賀風の家がさらに増えてきたのである。

先にも触れたように、湘南にはこれといったパターンはな



自邸「晴々ハウス」(設計:佐賀和光) 左上/外観 左下/デッキ 中/リビング 右上/ダイニング 右下/2階ベッドルーム

撮影/筆者

かった。白川村のような合掌造りもなければ京都のような町家もない。その意味では全国的に同じような地域で、時代に流されながら住人が気ままに好きなように建てていたのだが、湘南は新しいスタイルをつくりだした。「大屋根がある白い家」が湘南のイメージとして地元の人たちに共感を得た結果であろう。

町並みに新しい風景をつくるためには、建築協定など必要ないどころか、役に立たないことは多くの事例が証明している。これからは共有できるイメージを、建築家が提示できるかどうかにかかっているのではないだろうか。

#### 熊本の緒方理一郎

ひとつの住宅が閉塞的な住宅街を変えた事例もある。熊本県の緒方理一郎（1941～1990）である。緒方は親の敷地内に自邸を建てた。敷地はある程度広がったのだが計画道路が予定されており、RCで建てるとなると、母屋に沿って間口の狭い家しか建たなかった。

RCの躯体に内部は木造という混構造で、空間構成やインテリアも魅力的なのだが、それ以上に注目に値することがあった。周辺は高級住宅街だが、どの家もコンクリートの万年塀を巡らせていて、広くはない道路をさらに狭く閉鎖的に見せていた。

緒方は、計画道路にあたる部分を花畑にし、コンクリートの万年塀を取り払ってクリンプネットに張り替えた。閉塞的な町並みに風と光を与えたのである。その後、万年塀を取り払う家が少しずつ出てきたと緒方から聞いた。ひとりの建築家が自分の敷地内で提案したことが町並みを変えたのである。

#### 沖縄の金城信吉

沖縄の風土を体現したような建築家、金城信吉（1934～1984）にも触れておきたい。沖縄の白井晟一とも言われた建築家だ。

金城から聞いた沖縄の木造住宅の話は忘れられない。高知と共に沖縄は台風の常襲地である。台風が来るとなると雨戸を打ち付けたり縄で縛ったりし、小さな子どもはドラム缶の中に毛布を敷いてそこに寝かされた。自分もそうだったという。雨戸は毎回暴風で飛ばされるので裏に住所氏名が書いてあり、台風一過、拾った人同士で届け合うのだという。そんな体験から、ケンドンで建てる雨戸の遊びを少なくした。する

と雨で膨張して雨戸は動かなくなる。こうすると台風が去っても、雨戸が乾くまでは開かない。しかし、危険よりは暗いのを我慢した方がよいとの判断だったという。

あるとき料亭に招待された。広い座敷にふたりで座り、差し向かいで泡盛を傾けた。やがて綺麗どころが3～4人、三線で沖縄民謡を弾き始める。金城はおもむろに立ち上がり、激しい三線に合わせて、ゆったりとした、まるで能のように踊り始めた。アップテンポで激しいバチさばきと緩やかな舞。泡盛で朦朧とした酔眼には言葉では形容できない陶酔感を味わうことができた。

そんな金城が39歳の時に設計したのが沖縄国際海洋博覧会の「沖縄館」（1974）である。併せて多くの離島を回って御嶽の写真を撮り続け、沖縄の文化は大陸から直接続いている、ヤマトとは別物だというのをよく話していた。急逝したのが49歳だが、年齢が信じられないほど老成した思惟そして作風の建築家であった。

金城とは違った作風の建築家として國場幸房（1939～2016）がいた。大高正人の事務所に所属していた頃、栃木県議会棟の設計を担当したが、復帰前の1967年に沖縄に戻り、国建設計（現国建）に入る。沖縄海洋博のために設計した「ムーンビーチホテル」（1975）はオーバーハングした外観の先端を、細い柱が支えているデザインが強い印象を与える。

この設計に当り、外部の柱を図面に描き入れると、構造担当は柱を太くしてしまう。細くしたかったので、柱なしで構造設計し、振れ止めのようにして柱を立てた。まあ、構造的に



沖縄国際海洋博覧会「沖縄館」（設計：金城信吉）

出典／近代建築 1975年9月号

必要ないと言われるかもしれないけれど、最悪の時の保険ともなる、と話してくれた。この細さは栃木県議会棟の吹抜けに設けられた柱がモチーフであった。その後「美ら海水族館」（2002）を設計。国建の取締役会長まで務め、沖縄に行くと必ずといっていいほど一緒に泡盛を楽しんだ。

泡盛を楽しんだといえば洲鎌朝夫（1943～2008）も忘れてはならない建築家である。代表作は読谷村にある「やちむんの里」（1980）は電信柱や廃材となった琉球瓦（赤瓦）を主な材料としており、いわば土着的な建築群である。陶芸家4人のための工房で、登り窯が設けられていたが、現在では19の工房を持つまでになっている。

地方で頑張っている建築家はここに取り上げただけではない。北海道には、私の学生時代には必読書とされたジークフリード・ギーディオンの名著『時間・空間・建築』を翻訳した研究者 太田實（1923～2004）、建築家としてはレンガと鉄骨、ガラスのこれぞモダニズム建築という自邸を建てた上遠野徹（1924～2009）、さらにはニセコに45度傾けた(?)別荘を設計した倉本龍彦（1946～）など、いずれも個性豊かな人々である。

魅力的な建築家を青森から九州、沖縄まで含めたら枚挙に暇がないし、残念ながら今の私には暇がないので、文字通り割愛せざるを得ず、お詫びするしかない。いずれも、その土地に根ざして活躍する建築家がいまし、これからも健在であろう。また、生まれ育った地を離れて、世界的に活躍する人たちもいる。これまで取り上げたほとんどの建築が東京出身ではない。



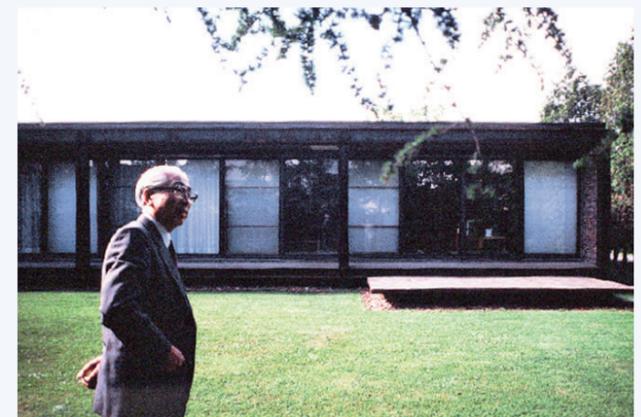
美ら海水族館（設計：國場幸房）

Photo by Alan Wat

そんな建築家のプロセスを私が一番知っているのは、現在では「リファイン建築家」と呼ばれている青木茂だろう。大分県、それも南端の蒲江という小さな漁村の出身で少林寺拳法6段。大阪で修業を積み、佐伯市に戻って子どもたちに少林寺拳法を教えながら細々と事務所をやっていた。知識欲は旺盛で、機会があれば海外にも出かけていき、その経験からか、既存建物の改修に注目した。今やリフォーム流行りだが、あえてリファインと名付けたのは、ただのリフォームではないという意味の表れだろう。その後事務所は大分に、福岡に、そして現在では東京に事務所を構え、国際的に活躍するようになった。地方の出身であったことが、さらなる飛躍のモチベーションになったと言えないか。こうなると、どこを舞台とするか、あるいは何をデザインのテーマとするかは別な問題のように思える。

完璧な美しさを求めたのがヨーロッパの歴史であり、それらは今でも存在している。しかし、20世紀に生まれた現代建築が100年を超えて存続できるだろうか。残るとすれば、ミース・ファン・デル・ローエの「Less is More」やル・コルビュジエの「現代建築の5つの要点」などのコンセプトだけではないだろうか。ところが、その土地に根ざした建築は、時代と共に変容しながらも職人の手によって代々受け継がれ、継承されていく。どちらを選ぶかは建築家の覚悟次第である。

まだまだ建築の世界は変貌していく。それを期待しながら筆を擱くこととする。これまでのお付き合いに感謝する次第である。（了）



自邸（設計：上遠野徹）

撮影／筆者